
環状ナイフ

ゆんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

環状ナイフ

【Nコード】

N4232Q

【作者名】

ゆんた

【あらすじ】

ちよつと修行しておいでよ、なんて黒淵眼鏡の適当な提案で俺は道場に缶詰にされることになった。回転するのは環境か視界か、或いはその両方かどちらでもないのか。見上げるのはいつだって天井と、微かに揺れるポニーテールだけ。そんな中、まとも過ぎる世界の中で呼吸したいなんて、俺は脈絡もなく願っていた。

自己

奔る銀線は俺にとっての血液だ。夜月に濡れた刀身の光は、麻薬のように血管を駆け巡り、クラクラとした恍惚感を抱かせる。まるで中毒者だ。呼吸をするようにナイフを振るう。それだけが現実だとも囁くように。

武器は力だ。力は理性を駆逐していく。純粋な暴力の前では理論は無意味だ。だからナイフを握ったとき、目の前が血色に染まるのは奇妙なことじゃない。理性をそぎ落とした、骨の髄にある衝動が顕わになっているだけだ。それ自体は誰でも持っている。俺の場合、それが少し奇妙だったというだけの話だ。

奇妙、世間一般では異常と言うのかもしれない。血管が細く浮き出た首筋を見て、或いは手首の動脈を見て、或いは乾いた冬の風に当てられて赤くなった膝裏を見て、そこを裂いて吹き出る真紅を浴びたいと思うのは、やはり異常なことなのだろうか。自分が普通と異なっているということを自覚したのは、小学生の中程になってからのことだった。

席に着き、授業が始まる。チョークを持つ教師の腕、前の席に座っている女子の首筋。幼い頃から俺はそこに一本の線が見えていた。赤く脈打つ血管のような、それでいて細く流麗な、一本の線を錯覚していた。ある日の放課後、好奇心からすれ違った他人のそれを切ってみると、甘美な赤い潮が吹き出た。全身を染める生暖かさに恍惚となったのを覚えている。

幸運なことに俺には才能があった。他人の気配や視線を臆気ながらも感知することができた。それを特別なことだと確信した俺は、自分の欲求を満たすことに専念した。それ以外のことを考えないように、それ以外のことを知らないように。だから俺の周りからは謎の失踪者が相次いだ。悪いことをした。彼らは運悪く台風に巻き込まれたようなものだ。どこにでも転がっている有り触れた不幸の数

々は、しかし俺に優越感を抱かせるには十分だった。

俺に両親はいなかった。だから自分の歪さに気が付くことができなかった。他人がいなければ自分の輪郭すら危うい。人間は他人の反応を通して自分を再構築していく。ならば俺の輪郭は正しく死で彩られていた。

自分で言うのも何だが、人当たりは良かったと思う。だから俺には友達という勘違いが沢山いた。人の輪の中にいるのは苦痛であると同時に俺を高ぶらせた。血袋の中にいるということが否応なく意識されてしまうのだ。俺は自分を律し、殺す人数の制限を自分に課した。その結果、俺の周りからは次第に人が消えていった。全員を殺すのは不味い。だから学校を転々とした。

高校生になるころには解体作業にも陶酔感を感じなくなり、俺はずいぶん丸くなっていた。突発的な衝動に襲われたときだけ自分を解放するようにしていた。体は軽く、自分の意思よりも速く動くようになっていた。自分という固体の性能が洗練されてきているように感じていた。だからだろう。俺は一人の少女に目を付けられた。

深海のように重たい夜闇の中、超然と佇んで俺を待っていた少女初めて正面から果たしあった同胞。夜風に流れるショートヘアは黒に近い茶色で、突き刺さるような威圧感を持った、そう、まるでナイフのような少女。紅く塗れた制服が月光に照らされる様は、あまりに魔的だった。魂まで吸われてしまうような危うさを孕んだ美貌に、俺は不覚にも見惚れていた。

そして俺は諭されることになった。人殺しはやってはいけないことだと。それは生まれて初めて受けた異常の指摘だった。

服の裏地に仕込まれたナイフが、急に色褪せた。これまでの行動が意味を失っていくのを感じた。異常者は自分を異常者だと認識しないから、異常者でいることが可能なのだ。常識というレッテルを貼り付けられた俺には、もう異常者でいることはできそうもない。

人殺しも、血の雨を浴びることも、その異常性も、知ってしまった今は。

でも、それなら俺は何で自分を定義すればいい？

コーヒーブレイク

立花睡蓮は事務所のソファに全体重を預けてぼんやりと視線を宙に向けていた。肩口で切りそろえられた茶髪が、背もたれに押し潰されてあちこちへと跳ねている。しかしそれを気にした様子はない。

部屋の中はコーヒーの匂いで満たされていて、ガラステーブルには空っぽのカップが一つ置かれている。外は生憎の曇り空で、窓からは曖昧な昼の光が差し込んでいる。それが睡蓮の気持ちを下げの一因であることは疑いようもない。

「寂しいのかい？」

「……そんなわけありません」

睡蓮は気の抜けた返事を返す。それを聞いて青山蘇鉄は人畜無害な笑みを浮かべた。黒スーツに黒淵眼鏡、好きなものは煙草とコーヒーという、どこにでもいる冴えないサラリーマンのような男だ。

彼は睡蓮の上司であり、魔術師なんていう胡散臭い職業を生業としている人物だ。不思議なことに給料はそれなりにいい。過去に理由を聞いたことがあったが、体を張った仕事だからそれなりの報酬を支払わなくては、とのことらしい。なんにせよありがたい話だ。身寄りのない身には金銭はいくらあっても足りない。

「そうか、僕はてつきり楽間君がいないから気落ちしているのかと思っただよ」

「別に、関係ないですよ。ただその皺寄せが私に来てるってことが不満なだけ」

「安心しなよ。君に押し付ける仕事はほんの少しだ。第一、楽間君は二週間の小旅行だからね。君を煩わせることはほとんどないと思うよ」

「……初耳、そうなんですか？」

「うん、僕としては彼に大きな男になってもらいたくてね。二週間

の修行ツアーをプロデュースしてあげたってこと」

「修行って、あの目付きの鋭い女性に預けただけですよね」

「そうそう、天宮螢君ね。彼女もなかなかエキセントリックな人でね。うん、まあ、いい経験になると思うよ」

蘇鉄が曖昧な言い方をするときは、内容が黒いときのみだ。過去の事例から言って例外はない。恐らく修行という名の拷問だろう。あるいは使い魔同然の奴隷生活か。散々な内容の思考を巡らせて、今は遠くに行ってしまった楽間に合掌をした。羽虫のごとき軽さの祈りは溜息となって放出された。

「いや、彼女も渋ってね。でも楽間君が強化種だって話をしたら目の色を変えたよ。……ふふ、さすがに霊長の進化系には興味があるのかな、彼女も」

「私、その話を詳しく聞いていないんですけど。あいつに半殺しにされた手前、それくらいの知る権利は認めてくれてもいいんじゃないですか？」

睡蓮がそう言うのと、蘇鉄は困ったように顎に手を当てて、一つ息を吐いた。

「とは言ってもね、加えて話すことは少ないんだよ。君に既に教えた情報で、まあ九十パーセントってところかな。残りは我々の学術的な定義とか、そういう類のことしか残ってない」

「まさか、本当に霊長の進化系、なんて適当な説明で終わらせるつもりですか？」

「それが一番イメージしやすいだろうと思ってね。……そうだな、具体的に言うならば、筋力の増加、免疫の強化、治癒力の促進、感覚の鋭敏化、ってところ。身体機能のあらゆる面が強化されたホモ・サピエンス、進化の過程を一段上った彼らのことを、仮に強化種と呼んでいるのさ」

語る蘇鉄の口調は淀みがない。対して睡蓮の思考はもやが掛かったように纏まらない。彼女自身も非日常に属する人間ではあるが、強化された人間といわれてもピンと来ない。結局、強化種とはスー

パーマンのような存在なのだろうと納得することにした。

「……ふふ、蛭君も弟子を欲しがっていた時期があつてね。まあ魔術師なら当然の欲求だが。ただ自分が教えると、教え子が耐え切れずに壊れてしまうと愚痴っていたっけ。その点強化種なら、まあ遠慮は要らない、というよりほとんどしないだろうね。いや、企画した身で言うのもなんだけど、なかなか実のありそうな二週間になりそうだね」

蘇鉄はふふ、ふふ、と気持ちの悪い笑みを浮かべながらコーヒーを啜る。それを見て睡蓮は楽間に同情せざるを得なかった。知り合ってから数ヶ月しかたっていないが、まあ、身を案じるくらいのこととはしてあげてもいいと思う。

調子に乗って、裏側の人間に目を付けられたのが運の尽きだよ、楽間。そう心の中で呟いて、睡蓮は脱力したまま目を閉じた。

天井

視界が何度目か分からない回転を始めた。体は重量を無視して円運動を始める。円の支点は自分の腰で、力積を加えたのは天宮螢の細い腕だった。

ダスン、と派手な音を立てて床に叩きつけられる。背中から伝った衝撃は肺から空気を奪っていく。俺は呼吸すら間々ならなくなつて激しく咳き込んだ。涙で視界が滲む。滲んだ先に見えるのは、折り重なった木々で構成された道場の天井だった。

体を少し動かすだけで激しく痛む。芋虫のように床をのた打ち回る俺を、螢は虫けらでも見るように見下している。螢の身長は高いから、まさに踏み潰される寸前の虫の気持ちを感じることができる。

しばらくの間、俺はその蔑むような視線を甘んじて受け入れている。美人なのだから笑っていいほしい。体の起伏を強調するような黒いＴシャツに、淡いブルーのダメージジーンズ、後頭部からは明るい茶髪がポニーテールに纏められて揺れている。問題なのは鋭すぎる目つきだった。どうして俺の周りの女子は穏やかさとは無縁の存在ばかりなのだろう。深層の令嬢になれとは言わないから、せめて穏やかに笑うくらいのことではできないのか。

「立て、楽間」

「げほ、無茶言うな、これで何回目だと思ってる。まともな人間なら内臓破裂で再起不能じゃねえの？」

「まともじゃないから私も相応の対応をしている。いいからもう一度だ。動作が荒すぎる。まるで洗練さが足りない。仮にも預けられたのだから責任がある。要望通りの体にして返すのが私の使命だ」

「人を物みたいに扱いやがって」

「人を物のように扱ってきたお前が何を言う。絶対強者にでもなつたと勘違いしたか？ 既にお前は手配済みの強化種だ。野に放り出されれば一時間と待たずして消滅させられることを知れ」

「はいはい」

俺は体に活を入れて立ち上がった。耳の奥がぼんやりとしている。すぐに平衡感覚を失うが、ふらつくのは意地で止めた。それを見て蛭はニヤリと笑う。それがまた気に食わない。

雇い主である青山蘇鉄が俺を放り出したのはつい先週のことだ。知人である天宮蛭が近くに来ているから、ちよつと修行でもしてきなさいとのことだった。魔術師である蘇鉄の知人にまともな人種なんて期待できない。睡蓮の哀れむような視線も俺の不安に拍車をかけた。

天宮蛭を最初に見たときは、何だ美人じゃんラッキー、程度にしか思わなかった俺も間もなく認識を改めた。電車に乗って数時間、人通りが十分の一になったのではないかと思わせるほどの田舎に到着、それから徒歩へ道場へ。ここまではいい。問題は道場の敷地に足を踏み入れた瞬間、蛭は問答無用で俺を地面に叩き伏せ、仕込んでいたナイフを全て奪っていったということだ。

「お前を二週間で更生させると、青山から要請を受けている。殺ししか知らない狂犬を、せめて情緒不安定な人間程度には復活させてほしいそうだ。ふん、無駄な玩具だ。こんなものを持ってどうしようというんだ、お前」

蛭は毒々しく言い放った。それが俺が始めて聞いた蛭の声だった。そして蛭は俺の目の前でナイフを粉々に砕いて風に流した。そのタネは未だに分からず仕舞いだ。

それから一週間、一日三時間の睡眠と一回の食事のみで、俺は蛭にボコボコにされ続けていた。ナイフがあつたらバラバラにしてやりたいと思ったのは一度や二度ではない。

気が付くと夜だった。混線した思考から、自分が気絶していたのだと理解した。タオルも何もない、ただ床に放り出しているだけ。とても怪我人に対する作法を知っているとは思えない。

横になりながら顔を傾けると、蛍がじつと夜空を見ていた。綺麗に晴れ渡った夜空には、星がひしめき合うように輝いている。都会では見ることでできない自然の光が、淡く板張りの床を照らしていた。夜風が吹いて蛍の髪が僅かに揺れた。

「起きたか」

視線を全く動かさないで蛍が言った。彼女の横顔もまた夜の光に照らされていた。だから、彼女を美しいと錯覚してしまった。

俺は起き上がりとして、体がほとんど動かないことに気が付いた。それでも無理やり起き上がろうとすると、蛍に鋭く静止された。初めてのことだった。

「今日でお前が来てから一週間、一对一の組み手の時間にしては、まあいいところだろう。促成栽培だな」

「よく言うぜ、容赦なく、骨を砕く勢いでボコボコにしてくれなくせに」

「お前にはこれでも足りないくらいだ。霊長の進化系である強化種なら、これの三倍は激しくしても十分に耐え得る。ただ、それだと私が疲れてしまう。そこまでしてやる義理はないな」

「なら最初から放っておいてくれ。……くそ、蘇鉄の野郎、俺をどうするつもりだ」

あの曖昧な笑みを浮かべた眼鏡面を思い出す。あいつが今の俺の状態を見たなら、横で煙草でも蒸かしながらニヤニヤと見下ろすに違いない。魔術師という人種は性格が悪いのがデフォルトなのか。「お前ならば一日もすれば動けるようになる。本題に入るのはここからにしよう。本来なら今すぐ動きたいところだな」

「あ？ 本題って何だよ」

「聞いてないのか？ 私の使い走りだよ。そもそもそのためにお前を引っ張ってきたのだが。青山の要望はそのついでだ」

「……あの眼鏡」

「別に私一人でも全く問題はないのだが、そうだな、私も強化種というものに興味があった。実際は拍子抜けだったがな。まあそーい

う訳だ」

「くそ、なら当然報酬は貰えるんだろうな。ハイリスクノーリターンなんて冗談じゃないぜ」

「安心しろ、ちゃんと青山に前払いしてある」

あの野郎、今度会ったら三度殺す。俺はボランティアであいつの下へいるんじゃない。寝床を貸してもらっている手前、あまり派手な言動は出来なかったが今回は別だ。一度刺し殺さないと気が済まない。

「そういうことだ。詳しい話は明日にする。まあ概要だけ言っておくと、こちら側の犯罪者の処理だな。実にお前向きだろう？」

言うだけ言っただけは去っていった。私室は奥の方にあるらしいが見たことはない。第一、追えるような体の状態で一日が終わったことは一度もなかった。

俺は寝転がったままため息を吐く。この意味不明で不毛な訓練が終わったのはいいことだ。もっとも、明日からまた別の仕事を吹っかけられるのでは笑い話にもならないが。

夜は深い。夏の風は生温いので、布団がないのはむしろ都合がもしれない。疲労によって薄れ行く意識の中、これまで幾度となく見てきた天井を見る。その仄かに黒ずんだ木々の重なりに奇妙な満足感を抱いたが、俺はそれに気付かなかったことにして目を閉じた。

標的表

次の日になった。太陽が真上から夏の日差しを差し込ませている。じりじりと熱せられた外気は肌を焦がすようで、地面は砂漠のように熱波を揺らがせている。道場は日陰だが、吹きぬける空気は生温い。

蛭は俺の横に胡坐をかいて座っている。さわさわとポニーテールが揺れていて、気まぐれな猫の尻尾を連想させた。猫といっても獅子のそれだが。迂闊に触れば食い殺されるのは目に見えていた。

「さて、背景の概要だけでも説明しておこうか。興味はないだろうが」

そう前置きをして蛭は語りだした。興味がないのは最初から同じだ。

「協会といっても色々あってな、派閥が入り乱れている。社会に対応できない異常者を取り締まり、取り込むシステムが生んだ弊害という訳だ。組織である以上、知識の同期は行っていて、それは門外不出の重要事項も含まれる。無論、伝える相手は選ぶがね。で、その門外不出の事項を知った人間が、協会を裏切った、という訳だ」

ここまで言えば分かるだろう、と蛭は言葉を切る。俺はせめてもの抵抗にと大仰に溜息を吐いた。使い走りとはよく言ったものだ。実に的を射ている。本来無関係のはずの俺が、なぜか協会運営の手伝いをする。これを使い走りと呼ばずに何と呼ぶ。奴隷といわれても俺は怒らない。溜まった怒りのエネルギーはあの腐った眼鏡野郎に三倍返しすることが決定している。

「そいつら、殺しちゃっても良いのか？」

「殺害は禁止、生け捕りが上の希望だ。確実に、殺害以外の方法で行動不能にし、協会へと連行する。それが今回の仕事だ」

「……」

沈黙は肯定だ。それがどのようなものであっても。蛭は心得てい

るようで、淀みのない説明を続ける。

「さて、対象の説明に移る。とは言っても実際に相対するまで実感が湧かないだろうがな」

「タネが分かっただけ問題ないさ。手品みたいなもんだ」

「そう平和にことが進めばいいがね。……奴らは三人一組のグループで、とある派閥の幹部だった者達だ。主に戦闘における魔術について、熱心に研究していた。机に噛り付いて理論だけ学んだモヤシ共とは違う、立派に戦える研究者だ。その証拠に、曲がりなりにも二つ名を持っているしな」

「……二つ名？ そんな文化が裏社会には存在するのか？」

「まあそう言っただけ、これは結構便利なんだ。ブラックリストを作成するときなんかに。特徴も纏めやすいし、記述も楽だ」

「そう言っただけ俺に一冊のファイルを渡してきた。無駄に分厚いそれにはぎつしりと紙が詰まっている。気乗りしないままペラペラと捲ると、そこには思わず目を細めてしまいそうな細かい文字が所狭しと並んでいた。

「……まさかこれを全部読めって言っただけじゃないだろうな」

「そんな訳ないだろう。緑色の付箋が張ってあるところからの三人だ。そこさえ読んでおけばいい」

言われたとおりにファイルを開く。現われたコピー用紙には顔写真が張られていて、無表情な一人の女性が映されていた。女性というよりは、まだ少女といったほうがしっくり来る。顔立ちにはまだあどけなさが残っている。しかし紙媒体でも分かる鋭い雰囲気、その幼さを完全に裏切っていた。写真の下からは詳細であろう文章が綴られていて、冒頭には大きく「氷牢」なんて文字が書かれてある。

「これが二つ名？」

「そうだ。そいつが一番目のターゲットになる。まあ、順番は何でもいいんだが、遠距離においてそいつが一番面倒だ。だから最初に叩いておく」

「最初につて、こいつら団体行動をしているんじゃないんですか？」

「そうでもないさ。魔術師っていうのは団体行動を嫌う人間が多くてね。とは言え互いに連絡が取れるくらいの状態にはなっているだろう。だから私が妨害に入る。諸々の魔術的な方法でね」

「……だとすると、実行は俺？」

「そうなるな。元々お前の修行も兼ねている。私一人でも本当は構わないんだ。ただ、旧友の頼みと 私の僅かばかりの興味によって、お前には一対一で魔術師と戦ってもらう」

「……武器は？」

俺は恐る恐る聞いた。蚩はニヤリと、これ以上ないくらい邪悪な笑みを浮かべた。

「当然、素手だ。忘れたのか？ 今回の要請は生け捕りだってことを」

氷柱雨

夜の帳が落ちた市街地で、氷柱の雨が降っている。「氷牢」との距離は実に五十メートルあった。いい的だ。迫り来る氷柱に一切の遠慮はない。恐らく蛍の妨害が入る前に、俺達の存在が露見していたのだろう。顔を合わせるなり攻撃してくるとは、戦いの美学というものを分かっているらしい。

周りに人はいなかった。この光景は前にも見たことがある。睡蓮と遊んだときの駅前も、似たような情景だった。人のいなくなった街は抜け殻のように寂しく、色がない。とは言えこの散乱する凶器の中、一般人が立ち寄れば五秒と待たずして物言わぬ死体となるだろう。高揚した思考でばんやりとそんなことを考えながら、氷の魔弾を一つ一つ潜り抜けていく。

最初は疑っていた。瞬殺されるつもりは無かったが、それでも魔術師のような規格外と素手で争えるとは思えなかった。確かにこの一週間、飽きるほどに実戦経験を積んできた。用いてきた武器は自らの素手。少なくともこの一週間は素手しか用いなかった。

まさか、これほどまでに効果があるとは思っていなかった。

飛来する氷柱の軌道が見える。「氷牢」の名に恥じない氷柱の弾幕の軌跡が、それぞれ独立したように知覚される。ならばこそ、その起動に合わせて拳を振るうことなど容易。目の前に迫っていたドラム缶のような氷の塊を、側面から衝撃を加えることでやり過ごす残り、三十メートル。背後で轟音が起こり、外壁が崩れていくのを感じながら、歩幅は緩めることなくさらに加速していく。

伏兵のような小さな氷柱が、ナイフのように俺の頬を掠めていく。体制が崩れ、そこに殺到する氷柱。手が届かないのなら、足を使えばいい。倒立の要領で俺は地面に両腕を付き、独楽のように体を回転させる。無数の氷を横薙ぎにする。砕く感触が脳髓を痺れさせる。

生暖かかった外気は氷点下に沈んで、吐く息は白く凍っている。ようやく「氷牢」の姿が見え始めた。残り二十メートル。無数の氷の死骸を映し出したように、氷牢と呼ばれた少女の表情は彫像のように冷たかった。俺の姿も見えているだろう。自分の魔術を潜り抜けられ、刈り取るうとする存在が見え始めているというのに、その表情に僅かな乱れも無い。

不意に、氷柱の軌道に変化が生じた。直線なのは変わらないが、俺の行動を先読みするようになった。回避する方向、進む方向、俺の一步先へ氷柱を飛ばしてくる。お互いの姿が見えるようになり、死線の精度は高まっていく。首下に死神の鎌を突きつけられた俺の体は冷たい。冷や汗が体の温度を下げていく。しかし反比例するように精神は熱を帯びていく。際限なく、中毒者のように爛々と。残り、十メートル。互いの髪の毛の揺れさえ近くできるほどの距離。

ここまで四十メートル、時間にして三十秒ほどの攻防。その間、一步も動かなかった少女。だから俺は彼女が動けないものだと確信していた。

だから、彼女が爆ぜるように駆け出したとき、俺には彼女が掻き消えたように見えた。

一瞬 伸び切ったゴムのようにスローモーションの中、彼女は俺の右肩に手を置いて、その力を解き放った。ガコン、と楔を打ち込むような音。体から発せられたとは思えないような鈍い音。砲弾が体に直撃したような衝撃、だというのに俺の体は吹き飛ばず、直立のまま固まっている。視線を下ろせばそこには、肩から馬鹿みたいに大きな氷柱を生やした、まるで奇怪なオブジェと化した俺の姿が、他人事のように認識された。

目の前の少女を見る。表情は変わらない。傷口が凍結する前に噴出した俺の血液が、病的なまでに白い顔に掛かっていた。

雪に、血を落としたみたいに それは、なんて綺麗な、情景。

「つ、あ」

遅れて、脳髓を破壊せんという勢いで痛覚が飛来する。傷は瞬時に凍り、血液を凍らせながら凍傷となる。体の内側が凍っていく奇妙な感覚に吐き気を覚えた。体は右肩を支点として持ち上げられていた。少女の細腕が、嘲るように俺を掲げていた。

少女は無表情のまま、俺の顔にもう片方の手を当てる。柔らかい少女の手の感触が、一瞬だけ鼻先に感じられる。

「……ごめん、死んで」

雪の精が歌うように、透明な氷の声だった。麻酔のように、耳を犯した。

俺は、死ぬ？　こんな救えない形で？

俺が、殺される？

殺す、ということ。摘み取る命。その意味さえも生存本能に書きされたまま輪郭を失っていく。

ただ、生きたいが為に。鋭く、鮮烈に。死が首筋に食い込み始めた感触を、痛覚よりも鮮明に感じながら　俺は初めて、生きるために殺害という手段を選んだ。

血の味

冷気が結晶していく。恐らく、あと一秒も無い。トマトのように弾ける頭部を脳裏によぎらせながら、その紅さを舐めるように想像しながら 俺の左手は、空間を歪ませるがごとく速度で弾けた。

狙うは、首筋。思考する頭部を、魔術の発動前に切断する。手は刀のように固められ、爪先は鋭く束ねられている。彼女がそれに気が付く。大した反応速度だ。良くて相打ち、それを感覚した少女は攻撃の為に練っていた魔力を防御に転じさせる。彼女の首元に発生した氷の層を、俺は指をぐちゃぐちゃにしながら突き破り、そしてその軟い頸動脈へと、吸い込まれるように

「殺すなッ！」

殺気の塊が、質量を持った音が、俺の真つ赤に染まった思考に滑り込み、支配した。手は少女の首筋に不器用に刺さりこみ 止まった。ずぶり、という肉を裂く感触が伝わってくる。少女が苦悶の声を上げると同時に、俺の体は独りでに後ろに飛びのいていた。

少女の足元に不可視のルーンが刻まれる。それは彼女を取り囲み、蛇のとぐろのように巻き付いた。勝負は付いていた。首の傷はそのまま、しかし時間が止まったように血を流さずに、氷牢と呼ばれた少女は活動を停止していた。

硬い足音。凍り付いた市街地の真ん中に、魔術師としての天宮螢が超然と存在していた。全てを凍らせるような視線はナイフに似ている。それに射抜かれて、俺はピクリとも動けなくなった。

「この 馬鹿者が」

恐ろしく平坦な声だった。だと言うのに、螢が怒り心頭だというのが伝わってきた。しかし、何に怒っているのかが分からない。困惑する俺を他所に、螢は動かなくなった「氷牢」を淡々と拘束していく。拘束具は何やら奇妙な文様が書かれた布だ。直接ルーンを書き込んだ代物らしい。蘇鉄の下で働いていたときに何回か見たこと

があつた。

布の隙間から覗く「氷牢」の顔は白い。新雪のように穢れが無く、また表情も無い。穏やかさも無い。結界によって停止した少女は透明だ。唯一、俺が指を差し込んだ首の血色だけが、吸い込まれるような赤色だった。

「楽間、私は殺すと言った」

「……ああ、成程」

俺は一人納得した。命令違反に怒る上司。何のことはない、簡単な話だ。

「でもこうしなきゃ俺が殺されてた。まさか戦いにおいて相手の命を重視しろ、なんて言わないよな？」

俺は気楽な調子で言う。しかし蛍の視線は変わらない。刺し殺すような氷点下の瞳。ほんの少し、寒気がした。

「……当然だ。生け捕りという私の命令も、言わば理想論に過ぎない」

「だったら何でそんなピリピリしてるんだよ」

「逆に聞こう。お前は どうして 笑っているんだ」

「……え」

顔を触る。冷え切った手は氷のようで、それでも触覚は吊り上った口元を伝えてきた。熱く、昂ぶった精神の名残。熱に浮かされたような表情に対して、体の冷たさが余りにリアルだった。

「この一週間、お前に過度な訓練を強いたのは、虐げられる者の気持ちを理解させたかったからだ。力なき者が蹂躪される現実を、お前がこれまで加害してきた者たちの気持ちを、僅かでも体感させるために。痛みを、知ってもらうために」

蛍の口調は淡々としているのに、どこか震えているように聞こえるのは何故だろう。今になって折れ曲がった指先の痛みを感じ始める。外は寒い。熱でふやけた輪郭がはつきりしてくる。余りに、空虚な。

「殺すことでしか相手を止められない殺人鬼が、のうのうと生き延

びられると思うな。その歪んだ感性は、周囲の環境すら歪ませるぞ。人間は自分の物差しでしか世界を測れないんだ。死に取り付かれたお前が、世界で生きていけるなんて思うな」

「……うるせえよ、お前に」

何が、分かる。 いや、何も分からない。俺だって。

「何にせよ後二人だ。結果自体はそれほど悪くは無い。タダ働きにしては良くやった方だ。……ふん、蘇鉄の馬鹿も面倒な個体を拾ってきたものだ」

「……」

「仕事を早く終わらせたのなら言え。お前のペースに合わせてやる。そう言い残して蛭は去っていく。恐らく、市街の修正に入るのだろう。蘇鉄も言っていた。魔術師は非日常の痕跡を消し去るために存在しているんだって。俺が拾われたのも道理だ。自分で監視していれば、痕跡を絶つことなんて容易だろうから。ただ、どつぷりと頭の先まで非日常に染まった俺にとっては、それは呼吸を止められることに等しい。

折れ曲がった指先を、ペロリと舐める。鉄の味が口に広がった。ただそれだけ。何も感じない自分がいる。ただ残されるのは、冷気で浮き上がった自身の輪郭と、ほんの僅かな紅い味だけだった。それがひどく、臍気で儂い。

乾き

次の日はめでたく休日が与えられたが、体がガタガタだったので寝て過ごすことになった。蛭は終始冷たい態度を貫いたが、最低限の処置はしてくれた。氷柱が貫通した右肩にはルーンが書かれた包帯が巻かれ、細かな傷には軟膏が塗られていた。こんなので何が変わるのかと思わなくもなかったが、何でも俺は強化種とかいう面倒な人種らしく、怪我の治りが異様に速いのだとか。確かに病院に担ぎ込まれて緊急手術が必要なほどの怪我だったのにもかかわらず、俺の傷は大部分が治癒していた。肩の傷は流石にまだだったが、塞がって血が止まる程度には回復している。我ながら、常人外の回復力に呆れるほどだ。

晴れ渡った昨日とは裏腹に、今日は空を灰色の雲が覆っていた。日は陰り、地表は湿気の多い風がゆっくりと流れている。今夜は熱帯夜になりそうだと、俺は一人眠れない夜を思っ**て**鬱な気分になった。……いや、鬱な原因は別にあるのかもしれないが。

「……殺人鬼、ね」

そう称されるのは今に始まったことではない。物心付いた頃には、既にそう呼ばれていたような気さえする。殺人と殺戮の違いは、加害する人間を差別するか否かの違いと聞いたことがある。殺戮するものが鬼、つまり殺人鬼であるのだと。その理論で言えば、俺が殺人鬼と呼ばれることについて反論の余地は無い。俺はいつだって、無差別に、目に付いた者を殺して回っていたのだから。

今にして思えば、なんて意味の無い日常だろう。

睡蓮に寝められたせいで、俺は息苦しい日常に縛られることになった。……だから俺はこんな形で他人の手伝いをしているのかも知れない。日常で暮らすために頑張ろうとする心が、俺の中に芽生えているのかもしれない。無論、自覚なんてものは無いが。

ゴロンと寝返りを打つ。布団なんて敷いてくれているはずも無く、

板張りの床は固く反発してくる。まるで、そう、日常のように。これまで全うな生活を送ってこなかった者を拒むように、硬く、痛みさえ感じる。それでもそこに居続けるのは、楽になりたいと願っているからかもしれない。自分で自分のことが分からなくなる。ほんの僅かな指摘、異常者が異常者であるための原点をちよつと突かれただけでこの有様だ。

自分に自身が持てないのだ。別に何てことは無い平凡な悩みだつてことは分かっている。それが一時の錯覚に過ぎないってことも、十分理解しているつもりだ。……それでも、他人と話しているとき、人とすれ違ふとき、自分の輪郭を実感できない。余りに空虚な、自分。気が付いたら、そうなっていた。

だから俺は人を殺し続けていたんだと思う。人の奥に眠る、最も純度の高いエネルギーに触れることで、ようやく自分を自分だと認識できた。世界の上にぼつんと立っている自分の存在を確信できた。そうしないと、まるで空気に溶けてしまいそうなほどに曖昧で、呼吸をすることさえ苦しかったから。でも俺は、そのことを楽しいなんて思ったことは無かったはずなのに。人を殺すときに笑うなんて。そんなの、普通じゃない。

肩の傷にそつと触れる。痛みはもうほとんどない。こんな化け物みたいな体になったのはいつからだっただろう。俺はほとんど傷つくことが無かったから、自分の異常性に気が付くことができなかった。ただ身体能力がちよつと高いだけの一般人。そう自分を認めてきた。その自身も、今は無い。自分は何者で　いや、自分が何なのかすら、確固たる答えを用意できない。

ふと、開け放った窓から蚊が入ってきた。手の届く位置。パン、と手を鳴らす。掌には潰れた死骸。他人の命を吸わないと、息を吸えない欠陥品。自己意識の希薄化。現代病だと片付けられればどれほどいいだろう。問題は、俺にそれなりの力があることだった。暴力は人を傷つけるが、加害者にしてみればそれは最高の娯楽だ。他人の存在に踏み込んで、それを蹂躪するなんて、なんて甘美な出来

事だろう。だから、嵌ってしまった人間は、なかなか抜け出せない。
そこが余りにも居心地が良すぎるから。

ひどく喉が渴いた。血を啜らないと生きていけない蚊のように。
そんな自分を、嫌だと思ったのは初めてのことだった。

内側

夜は深く、街灯が無人の街にぼつりと光を落としている。

二人目のターゲットは「風斬り」という二つ名を持った人物だった。ひよろつとしていて背が高い。目は釣りあがつて細く、黒スーツも相まって中国マフィアのような相貌の男だった。

「……成程、そういうことか」

男が口を開いた。柔らかいのに冷たい声だった。俺との距離は二十メートルほど。相変わらず人氣が皆無になった街中で、俺と「風斬り」は対峙している。

「意外だな、あんたら俺とは話したくないものだと思ってた」

「もちろん話す言葉など無い。……先日から『氷牢』と連絡が付かなくなっていたのは、お前たちが原因か」

「個人行動はするべきじゃなかったな。例え協調性が皆無だったとしてもな」

「戯言を。我々は元々群れていたわけではない。利益が一致したから、一時的に手を組んだまでのこと。……それにしても意外に早かったな。腑抜けの教会にしては、随分と手回しが早い。それもあ得天宮堂ならではかも知れないがな。ふん、結界が張られていたことに気付かなかったのも道理か」

言って、男は両手を胸の位置で構える。ボクサーのように腋を締めて、眼光は狩をする肉食獣のように鋭さを増す。それに習って俺も半身になって構えた。思い返すのは、この一週間で無数に行われた組み手の数々。

「お前に直接の恨みはないが、死んでもらう。俺ももう一人の助太刀に行かなくてはならないからな」

「協調性は無いんじゃないかったのか？」

「場合によるさ。私たちは等しく、協会に失望し絶望した者たちであつたからな　！」

男は駆ける。二十メートルあった距離は、一秒と待たずに詰められる。加速を殺さぬままに放たれた拳は風を唸らせ、ぎりぎり回避した俺の耳元を通過していく。僅かでも目を逸らしたら終わりだ。俺は距離をとるためにコンパクトな打撃を放つ。しかしそれをいなされ、数瞬の隙にたわめられた脚が俺の腕を打った。

直前で飛び退いていたおかげで衝撃は軽減されたが、それでも一瞬腕の感覚が飛ぶ。不運なことに被弾したのは右腕だ。病み上がり、にこの衝撃はつらいものがある。追撃を避けるために大きく後ろに下がる。まずは呼吸を捕まれないことが先決だ。格闘戦ならば望むところだ。ペースの握り合いなら体に染み付いている。

男が前に出ると同時、俺も駆け出す。互いに微かな腕の動きでフエイントを掛け合い、拳を放つ。俺のこれは我流の産物だ。男のように洗練された動きではない。しかし、積んできた場数では負けないつもりだ。クロスカウンターの軌道だった拳は、しかしお互いが身を逸らすことで空を切った。オン、と風が鳴く。直撃すればコンクリートさえ砕く必殺の拳。

「随分楽しそうだな、お前」

対峙した男が唐突にそう言った。それに反応する余裕はない。俺は相手の攻撃を凌ぐだけで精一杯だった。心は熱せられて何も考えられない。視界が広がり思考はふやけていく。

一連の攻防が終わり、二人は同時に距離を取った。一筋の汗が額から垂れた。ぼたり、と地面に染みを作る。息は切れて、熱帯夜の風よりも熱せられている。

「……何のことかさっぱりだ」

搾り出すようにそう言つて、自分の口元が歪んでいることに気が付いた。手を触れると、それは確かに笑みを象っていた。まるでサカスのピエロみたいに、歪で空虚な笑み。

「……何で」

楽しさなんて、これっぽっちも感じていない筈なのに。

「何故、とは奇妙な疑問だな。お前の素性は知らないが、生粋の戦

闘者だろう、お前は。ならば自然なことだ。呼吸をするように戦いへ躍り掛かり、蹂躪し、それ以外では自分の存在を実感できない欠落品だろう」

「……」

「私も同類だから分かる、分かるとも。世界と自分との間に目に見えない壁のようなものがあって、どうにもこうにも埋まらない。それを超えるためには、純粋で強烈なエネルギーが必要だ。たとえば、そう、他人の命などが」

「……それが、これの正体？」

呆れるほどに単純で、それ故に救いのない回答だ。あまりにも。だって、俺は要するに、一人が寂しかっただけじゃないか。他人を傷つけないと自分を実感できないのに、他人に寄り添おうとしている自分が、なんて、無様。

男は心底楽しそうな表情を浮かべている。研ぎ澄まされた雰囲気霧散させ、道端で偶然旧友に会ったかのように、綻んだ顔をしている。

綻んで、綻びだらけだ。過去とか、心とか。

自分の中に埋没していくのを感じる。衝動だけはそのまま、棘が刺さったように微妙な痛みを残しながら、曖昧な自分を感じていた。ただ、分からないだけだ。何もかも。自分のあり方とか、世界の意思とか、何だか壮大すぎて眩暈がする。

そんな歪な空気を裂くように、

「敵前で戦意喪失とは、馬鹿かお前は」

カッンと、足音が、衣擦れの音と影が、

「下らない戯言に耳を貸すな。そんなこと、お前はもう知っていたじゃないか。その矛盾を何とかしたかったから、馬鹿みたいに殴られ続けたんだろう、この一週間」

俺の横に寄り添うように立った。

すらっとした姿勢とか、風に揺れるポニーテールとか、精悍な顔つきとか。その時、俺は始めて人に縋り付きたいと思った。

「……天宮蛍。お前はてつきり片割れの足止めをしているものだと思っていた」

「別に、それでも良かった。百パーセントの安全を期すならな。もっとも、この結果はそれなりに自信があつてね。半端な奴じゃ感知すら出来ない代物さ」

「……ふん、それだけの力がありながら協会に従うお前が分からん。お前ほどの実力なら、身を隠し自由に魔術を極めることくらい簡単だろうに」

じり、と男は一步下がる。それに合わせて蛍は一步前に出た。俺も続こうとすると蛍に制された。無言の背中が、任せると言っていた。何故、今になって、これほどまでに心が揺れているのだろう。大した衝撃もなかったはずなのに。

蛍は右手をかざし、指先で空を切る。残光がルーンを描き、何もなかった空間に意味を持たせていく。余りにも速い。一つ指を振れば五つのルーンが浮かび上がる。それを見て、男の表情があらさまに強張った。

「くそ」

そして、耐えかねたように後ろを向いて逃亡した。狩る側だった男はまるで草食獣のように、わき目も振らず、ただ無心で。

そしてそれを逃がすほど、狩人は甘くない。

「別にお前には恨みはなかったが、予定変更だ。死ぬ寸前まで行かせてやる。さぞ希少な体験だろう？」

溜められた魔力を解き放つ。ルーンは爆発的なまでに発光し、結晶し、炎という一つの形となる。それが無数、ルーンの個数だけ表れて 蛍の指の方向へと一直線に爆ぜた。

流星のように尾を引く炎は、網膜に焼きつくほどに美しかった。その後聞こえてきた悲鳴すら、全く気にならないほどに。

「……蛍」

「撤収だ。お前も帰って寝ろ」

淡々と言う蛍は、なぜか笑っているように見えた。

魔力の光があふれている。ゴーストタウンに点々と灯る魔力の炎が、蛍の横顔を淡く照らした。余りに綺麗過ぎて、目を奪われた。その有り様が美しいと感じた。

今度こそは、錯覚ではないと胸を張って言えるほどに。

柔らかさ

雲間から覗く日の光に目を細めた。曇りのち晴れ。目が覚めたときは暗澹とした曇り空が広がっていたのに、正午を過ぎる頃には青空が見え隠れしている。

俺は道場の縁側に座ってぼんやりと外を眺めている。体二つ分ほど離れたところには蛍も居る。目を瞑って、何やら考え事をするようで、実際は何も考えていないような、穏やかな表情。組み手が終わって四日目になる。たったそれだけしか経っていないのに、見える景色はずいぶん変わっていた。

そっと右肩に触れる。傷口はもうない。頬や腕にあった無数の傷も感知して綺麗になっていた。今までの俺なら、幾らなんでもこの回復速度はありえなかっただろう。自覚したから治せるものもあるのか。

体を横にしたくなって後ろへ倒れた。目に入るのは木目の天井と現れ始めた青空。頬をなでる風もどこか心地よい。吊り下げた風鈴がチリンと涼しい音を立てる。あまりにも静かで、なんて幸福な時間。緩やかな無言の時間は、体に酸素を行き渡らせるように全身へ染み込んでいく。

「……蛍」

「何だ」

「昨日、どうして割って入ったんだ？ 別にあのまま放っておいても、あんたは困らなかつただろ」

「別に、青山の依頼がお前の更生だったからな、あまり苛めるのも可哀想だろう」

「そんなこと思っただけにさ」

チリン、チリン。

雲は流れていく。青空は突き抜けるように青い。

街の音は遠く、車の排気音や人々の喧騒は微かにしか聞こえない。

いつもこれくらい静かだったなら、俺ももつとまともな生活を送れていたかもしれない。

別に、普通に暮らそうとしていたわけじゃなかった。俺はただ、俺の中身の混沌とした何かをどうにかしたかっただけだ。あまりにも普通で、でもその実感がなくて、だから異質で、普通ではいられなかった自分の姿が、フィルムに映し出されるセピア色の映像となつて、初めて客観的に実感できた気がする。俺という人間が辿ってきた現実と、どう在りたいかという願望と。

人に触れたかった過去の自分。煌く生命の中心に触れたかった自分。それは全身が痺れるように強烈な力量だけど、寄り添うことでも自身の存在を実感できる。穏やかで流れるような、暖かい日溜りのような、体を寄りかからせたくなるような、そんな力も、あるのか。

全身が棘だらけで、今はまだ想像しか出来ないけれど。

「……まだ、時間はあるよな」

「ん？」

「なあ、俺に戦い方を教えてくれよ。他人を傷つけなくてすむような、他人と寄り添えるような力が欲しい。じゃないと、俺はいつまで経っても前に進めない気がするんだ」

独白のようにポツリと呟いて、全く、子供のように目を逸らしている。それを見て蛍がどう思ったかは分からない。無言の時間がゆつくりと流れて、そして蛍は立ち上がった。

「ほら」

差し伸べられた手は、あまりにも女性過ぎて言葉を失った。

しどろもどろになった俺は、きつと面白い顔をしていたのだろう。蛍は穏やかに微笑んだ。それがまた、クラリとするほどに眩しい。

夏の光のせいだ。俺がまともに喋れないのも。

差し伸べられた手をとった。柔らかい、ひとのてのひら。

円

幾ら田舎とは言え、無人はやりすぎだ。毎日この情景を見ていると、これがデフォルトのように感じてきてしまつて困る。実際、俺がこの町に来てから、まともに人が歩いているのをほとんど見えない。道場にいるか、結界の中に居るかの二択だったからだ。

人気は皆無。街は静寂に沈んでいる。街灯の光だけが、点々と白々しい明かりを添えている。でも今日に限っては一人じゃないから、空虚さを感じない。俺から数歩離れた位置に、保護者のように蛍が立っていた。真っ直ぐに、背景に映る影のように。

前に出たのが俺一人だったのが不満だったのか、目の前の人影はあからさまに顔をしかめる。日本では悪目立ちしまくりの紺のローブに、十字架を二つ首から提げている。人目で不審者と分かる姿だったが、顔は意外に端整で、ジャーニーズが教会にいたらこんな感じになるのだろうか、といった風貌だった。

二つ名は「二重」なんて良く分からないものだ。蛍に由来を聞くと、単純に魔術と剣を同時に使うからだそうだ。本来魔術は高度な精神活動が必要とするため、近接戦闘との合わせ技と言うのはポピュラーではない。大部分の魔術師は、自身の強化魔術や一節の魔術しか使えないものらしい。一部の天才だけに許された魔術戦士の立場。

彼は凡才だった。しかし天才の技に心を奪われた。だからそれを量産化できないかと考えた。

「……ま、その発想自体は嫌いじゃないね。生まれ持った資質に後天的な要素で対抗するなんて、なかなか熱いじゃん」

「天宮蛍、どういふつもりだ」

俺の言葉を完全に無視して「二重」は蛍に話しかける。言葉は吐き捨てられたように乱れて震えている。

「他意はないよ。今日の私は立会人だというだけの話さ」

「馬鹿にしているのか」

「馬鹿にしているのはそっちだろう。こいつだったら勝てると思っただのか？ 残念だがこいつは私の息が掛かった人間だ。相手としては十分だと思うが。それに、私としても時々テストを実施しないと、割に合わないしな」

「……お前ならばまだ諦めも付いたが、ここまでふざけられては話が別だ。覚悟しろ少年。手土産に貴様の心臓を貰っていく」

ありきたりな台詞を吐いて「二重」は虚空から剣を取り出した。神話に出てくるような幅広の西洋剣。その切っ先が俺の方にぴたりと向けられる。

「……いいな、あの魔術。なあ蜚、あれ俺にも出来ないかな」

「無理だな。人生を捧げる覚悟で望めば話は別だが。魔術師としての素養は幼少期に育むものなんだ。お前によっぽどの才能があれば話は別だがな」

「ちえ、ホント、つくづく冷たい世界だよ」

でも、だからこそ微かな熱量が温かい。寄り添える誰かが居るなら、幾ら寒くても平気だ。

「やろうぜ魔術師。俺はこれで仕事開きなんだ」

「ほざけ一般人。こちら側に踏み込んだ以上、一切の容赦をするつもりはない」

「結構」

かまわない。

こちら側もそちら側も知ったことか。人は人のままだって分かったから。

踏み込む。コンクリートが砕ける感触が伝わってくる。その速力に「二重」は若干驚いた表情を浮かべたが、すぐに迎え撃つ姿勢をとった。素手のこちらが行える攻撃方法は、零距离まで接近してのインファイトのみ。故に躊躇は不要。ただ懐に踏み込むのみ。

放った牽制はいなされる。カウンター気味に振るわれた西洋剣を

身をかがめて避けて、再度掌底を放つ。相手の片手で防御されて、そして相手が詠唱をしていることに気が付いた。ニヤリと笑う「二重」が、飛び退こうとした俺に向けて掌を向けた。

目の眩むような閃光と共に収束された魔力が放たれた。光術系の圧縮魔術だ。それが複数、ホーミングレーザーのように枝分かれしながら向かってくる。道を縫うように進んでくるそれらは、意思があるように不規則に軌道を描いた。

コンマ数秒で着弾するだろう魔力の束、それと同時に突っ込んでくる「二重」の影を見ながら　俺は笑みを隠すことが出来なかった。

肘を緩く曲げ、重心を一点に落とす。そこを中心として円を成す。光術の初弾が掌に当たる。しかし痛みはない。ただこちらに向かつて流れる方向性をちよつと逸らすだけで、光弾は面白いように後ろに逸れていく。

円。

力を打ち消すのではなく、力を逸らす技術。流れる力をそのままに、方向性のみを微妙に変える体の使い方。極めれば相手に跳ね返すことさえ出来るらしいが、付け焼刃の俺にはそこまで望むことは出来ない。

しかし「二重」の表情は面白いように強張っている。スペックに頼り切った素人だと思っていたのが、曲がりなりにも戦闘術のようなものを使ったことがあまりにも意外だったのだろう。そして、加速された体は止まることなく、俺の下へと一直線へ突っ込んでくる。容易い。振り下ろされた剣の腹にそつと手を添える。それだけでまるで魔法のように「二重」の体が地面に叩きつけられた。漏れる悲鳴と空気が抜ける音。しかしすぐに立ち上がり、二度のバックステップで俺から十分に距離をとった。それは戦術的撤退ではなく、恐れが生んだ敗走だった。

「馬鹿にするなよ、魔術師」

「……有り得ん、それは一朝一夕で身に付くような代物ではない。

鍛錬に鍛錬を重ね、力という概念を理解しつくした者のみが到達することの出来る一つの極みだ」

呆然と、それでも何とか自我を保とうとするかのような「二重」に、蜚はあまりにも適当な声を投げかけた。一步引いた位置から、改めて存在を刻み込むかのように。

「知っているものだとばかり思っていたがな。そいつは強化種だ。協会が探して止まない、可能性の結晶だよ。ありとあらゆる才能を内包し、体は強く、構造は人間と同一なようでは無い。故に孤独を深めるしかなかった、一人の天才だ」

「……そうか、道理で」

道を歩けば擦れ合い、人と話せば擦れ合い、一人で居ても擦れ合うような、一人で生きていく力がありすぎるから一人で生きていくしかなかった孤独な存在。抛り所となる場所を見つけられず、自分の存在さえ実感できず、ただ、ぽつんとひとりきり、まっさらな中に浮かんでいる。

でも。

「人を勝手に一人にすんなよ。孤独な格好良さなんて望んでない」

「ふふ そうだな」

そして背景の魔術師は口をつぐんだ。そこには誰も居ないようで、しかし確かな存在が背中に伝わってくる。だから安心できる。灰色のコンクリートブロックはもう要らない。

だから、俺と一緒に歩いてくれますか。

「……お前は幸せだな、強化種」

「ああ、否定はしないよ」

「間違いなく、お前は俺たちの同類だったのにな。絶望し、極論でしか武装できなかった欠陥品だったはずなのにな」

「別に、そうあろうと望んできたわけじゃない。あんたたちとは違うさ。あんたたちは異常でありたいから異常でいたんだ。得られたはずの全うな暮らしを捨てて、自身の中身に埋没していつて、被害者面をするのは見過ごせない。まるで普通の暮らしが良かったみた

いに聞こえるぜ」

「……何も、そういうつもりはないよ。ただ、すごく当たり前のことだが、人の輪の中で暮らしていこうとするお前が、あまりにも眩しくて、まともに目を開けないだけさ」

彼は西洋剣を構える。表情は変えないまま、ただこちらをじっと見据えて。敷かれたレールは変えられない。終点が仮初の結末だったとしても、演劇にフィナーレは付き物だろう。だから俺も拳を構える。脱力し切った体は昂ぶらずに、陽光へ向けて歩き出そうとしていた。

事は単純だ。駆け出てきた相手の腕を縫って、胸へ手をトンと乗せる。それだけで終わった。派手な音もなく、街の静寂が痛いほど耳を打つ中、どさりと「二重」は前に倒れた。

環状ナイフ

道場の門を出ると見慣れた姿があった。夏の風に揺れる短い茶髪と、気だるげな雰囲気はいつもの通りだ。ほんの二週間しか経っていないのに、ずいぶん久しぶりの気がする。

睡蓮は俺を認めると片手を挙げた。俺もそれに答える。連日の戦闘でぼろぼろになった制服はスカスカで、いい具合に涼しい。

「……あんた、何でそんなぼろぼろなの」

「察してくれば幸いだ」

「そうね、同情だけはしておく」

それだけ言って睡蓮は踵を返した。俺もその後に続く。どうして迎えに来てくれたのかは分からない。ただ単純に気が向いたからか、蘇鉄に命令されたか、或いは良心の呵責に耐え切れなくなったのかもしれない。……いや、最後の一つは有り得ない可能性か。

田舎道を歩く。初めて見る町の人々の姿。ちよつと離れるだけで別世界だ。人口の密度もそうだが、質も違う。両脇の商店街は人々の生き生きとした生命力で溢れている。

不意に先に行く睡蓮が口を開いた。

「あんた、身軽になつた？」

「ああ、全身を持つていかれた」

「……ふうん、楽しい人みたいね。あんたの宝物のナイフを一本残らず没収していくなんて」

「ま、別にいいかな、とか思ってるけど」

俺がそう言うと、睡蓮は耳を疑うようにこちらを向いた。全く失礼な。人はいつまでも子供ではいられないのだよ。三日見なければ人は見違えるほどに成長するのさ。

「あんた、あれにかなりお金掛けてたでしょ」

「ああ、それこそ人生の全てを掛けてた」

「いや、大して上手くないから」

「ギャグで言ったんじゃねえよ」

粉々に砕かれて、銀色の砂になって、それでも俺はここを歩いている。新しい視点で、綺麗に透き通った世界を両目でしっかりと捉えている。

極点のエネルギーは眩しすぎて、俺にはもう要らない。赤々とした血潮を浴びなくても、寄り添うことで俺は生きていける。それが錯覚に過ぎないにしても、多かれ少なかれ騙し合いの渦中で進んでいくしかないんだ。

ならちよつとだけ、甘えた理想論を振りかざして生きていても、罰は当たらないだろう。

人と人は寄り添って生きられるなんて、そんな戯言めいた錯覚ですら。

「……あ」

俺は唐突にあることに思い当たった。充足も先立つものがなくては始まらない。立ち止まった俺をいぶかしむように睡蓮は振り返った。

その鼻先に、俺は親指と人差し指で円を作って突きつけた。残った指先をまるでナイフのように尖らせて。

「交渉、手伝ってくんない？」

目を瞬かせて、睡蓮は呆れたように溜息を吐いた。

ナイフを無くして涼しくなった懷には、環状に巡るもの同士、幸せの茶封筒が似合うだろう。

確信して、俺たちは陽光に照らされた帰路を歩いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4232q/>

環状ナイフ

2011年4月29日18時40分発行